

読書が国を救う

2025.5.30

戦国の三英傑といえば、信長、秀吉、家康である。いずれも優れた武将である。ただし、3人の中で、庶民に教育を施し導いていくことを考えたのは家康だけである。徳川の世が、15代の長きにわたり続いた所以であり、現代の日本という国に及ぼした影響も計り知れない。

「7歳の児童たちの読書量が将来の世界における英國の位置そのものである」と言ったのは、イギリスのブレア元首相である。卓見としか言いようがない。国民の読書量と国力は一対である。そう考えると、今の日本はどうであろうか。日本は、ここ数十年で、今まで培ってきたすばらしいものをどんどん捨ててしまっている。

著しい読書離れもそうである。1年に1冊も本を読まない大学生が増えているという。特段、驚かない。むしろ、小学生が本を読まなくなるほうが怖い。ここには、ブレア元首相がいう7歳も入る。小学校の先生や保護者が、そこまでの危機感をもっているとは思えない。読書の効用は、見えにくくわかりづらいため、仕方がないところもある。

読書離れを書店の数で見てみる。1999年には、日本の書店は、約22000店あった。それが、2014年には約14000店になった。令和7年の現在では、10000店を切っている。ちなみに、幕末には、江戸に800軒、京都に200軒の本屋があったという。江戸時代末期の識字率は約9割を超える、世界で群を抜いていたとも言われる。この一般庶民の識字率の高さが、明治維新を成した要因であったことは、いまや定説となっている。

數学者の藤原正彦氏が、その著書『国家と教養』の中で言っている。「江戸末期、江戸に来たイギリス人たちは、普通の庶民が本を立ち読みしている姿を見て『この国は植民地にできない』と早々と諦めました。『自国を統治できない無能な民のためには我々が代わって統治してあげる』というのが植民地主義の論理でしたが、庶民が立ち読みする光景は本国にもないものだったからです」そして、こう続ける。「読書は国防となるのです。書店数の激減は我が国の将来にかかる暗雲といえます」

福島市を見てみる。書店は減ったのだろうか。残念ながら、どんどん無くなっている。現実は厳しい。商売柄、教育書コーナーを探すことがある。そんなコーナーはもはや無いという書店が増えている。教員の教育書離れも深刻である。

小学生が、本来もっているはずの知的好奇心や活字への興味は、どこかにいつてしまったのだろうか。そんなことはないだろう。新しい本を手にする。読み進めながらページをめくるときのあのワクワク感は、子どもならではの、子どもだからこそ味わえる特権のようなものである。今一度、子どもがもっている力を呼び覚ましたい。